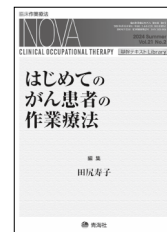


田尻 寿子 (編)

はじめてのがん患者の作業療法 (臨床作業療法 NOVA 第 21 巻 2 号)

澤 俊 二
(岐阜保健大学, 作業療法士)



30 歳 (1981 年) のとき口腔がんを患い、化学療法、放射線療法、手術療法を受けてから復職して 7 年目のころ、当時の私は 3 人目の子どもが生まれたばかりで、頬の陥没、顔の変形がひどくなり、気になりだしていた。大きな入れ歯を入れていたため少し構音障害があり、放射線療法の後遺症で摂食嚥下障害にも苦しんでいた。また、時々うつ状態になっていた。術後 5 年間、口腔外科の外来診察は再発の予兆の発見のための診察だけで、障害の有無に関して、医師はまったく関心を示さなかった。口腔がん後の長く続く心身の障害に関する相談窓口がないことに私は悩んでいた。44 年前のがんのリハビリテーションがなかった時代の話である。

そんな前置きはさておき、編者の田尻寿子氏とは、今から 30 年以上前、慶應義塾大学月が瀬リハビリテーションセンターで一緒に働いていた縁がある。氏の臨床スタイルは、徹して患者・家族に寄り添うことだった。その後、長くがんセンターで、リンパ浮腫等に対する作業療法を実践、深化され、発言をし、法制化の中で作業療法の名を入れるのに尽力されたが、氏の一贯した臨床スタイルがもたらした結果であり、その集大成が本誌の刊行であろうと推察する。

2007 年、がん対策基本法が施行された。国と都道府県が連携し

て、①がん予防および早期発見の推進、②がん医療の均てん化の促進、③研究の推進の 3 本柱で、がん対策を総合的かつ計画的に推進することになり、現在、「第 4 期がん対策推進基本計画」が進行している。第 2 期基本計画からリハビリテーションは重要な意味をもつようになり、2010 年には「がん患者リハビリテーション料」が新設された。その後、がん患者のリハビリテーションは深化し、ついに、田尻氏は作業療法に特化した「がん患者の作業療法」の入門書として企画した本誌を発刊された。悩む私にとり、刮目すべき内容を揃えていた。

第 1 章は、「がん患者の作業療法の理解に向けて」と見出しをつけ、初めてがんリハビリテーションを志す作業療法士向けに、そして、対外向けに作業療法ががんとう向き合うかをアピールする内容となっている。関連施策に始まり、ライフステージ別 (小児・AYA 世代と高齢者) の課題と作業療法、各病期における作業療法、在宅における作業療法、リスク管理、評価法、精神腫瘍学と作業療法、がんサバイバーシップと作業療法と、わかりやすく丁寧に説明をしている。がんに対する理解が深まったところで、第 2 章は、「作業療法の実践に向けて—がん患者の作業療法に必須の評価とプログラム」として、脳腫瘍の作業療法、頭

頸部がんの作業療法、乳がんの作業療法、肺がんの作業療法、消化器がんの作業療法、骨・軟部腫瘍の作業療法、骨転移の作業療法、造血器がんの作業療法、リンパ浮腫に対するリハビリテーション、がん関連認知機能障害の作業療法、化学療法誘発性末梢神経障害 (CIPN) の作業療法、精神的苦痛に対する作業療法、社会的苦痛に対する作業療法—就労支援のプログラムに言及し、わかりやすく平易に述べているのには感心させられた。精神的苦痛と作業療法には我が意を得たが、長期にわたるケア体制 (終末期も含めて) についての言及がなかったことに対しては、今年発行のアドバンスに期待したい。

また、他社刊行物ではあるが、本領域の参考書として『がんのリハビリテーション診療ガイドライン (第 2 版)』〔日本リハビリテーション医学会、他 (編)、金原出版、2019〕がある。各がんのリハビリテーションエビデンスが述べられている。包括的リハビリテーションの中で作業療法が出てくる。併せて読まれると本誌の貴重さがわかると思う。

本誌が、「がん患者の作業療法」の入門書としての使命を果たすならば、社会啓発に資するならば、大変喜ばしいことである。

B5 判 150 頁 2,700 円+税
青海社 刊
☎ 03-5832-6171